

[研究報告]

発達障害が疑われる学生の現状と課題 ——定型から非定型へのスペクトラム的視点の重要性——

西田麻野*・高平小百合**

要 約

近年、発達障害が疑われる、もしくは発達障害傾向と表現される大学生の存在が顕在化するようになり、障害と個性との間にある境界について議論されることが増えている。最新の遺伝子研究では、遺伝子発現が環境要因によって影響される可能性が明らかとなり、それが定型—非定型の連続性と多様性に寄与していることが示唆されている。しかしながら実際の教育現場などでは、発達障害者と健常者に対する連続的視点はほとんどみられない。そこで本論文では、発達障害が疑われる学生の現状と課題について以下の6つの観点から議論する。まず、診断にまでは至らないが、中程度の自閉傾向のある閾下ケースについて、及びその精神医学的問題の大きさを論じた。次に、発達障害学生の現状と支援ニーズについて、特に診断のない学生などが自ら支援を求めることが難しい現状を議論し、発達障害学生の支援体制や今後新たなアセスメント方法が検討されていく必要があることを提案している。また、大学生の自閉症スペクトラム障害傾向に関するこれまでの研究と今後の課題について触れ、今後の発達障害学生のスクリーニング、アセスメントに必要な視点として、大学生生活の場面で観察される自閉傾向による行動特徴を、周囲からの視点で量的に評価するスクリーニング方法や、いくつかの指標を使用して状態像を把握していくことの重要性を述べた。最後に今後の大学教育や支援における定型から非定型までのスペクトラム的視点の重要性について考察する。

キーワード：大学生発達障害、閾下ケース、自閉症スペクトラム

I はじめに

1, インクルーシブ教育と傾向

初等教育から高等教育に至る学校教育の現場でインクルーシブ教育の重要性が叫ばれ、発達障害者と健常者がともに学ぶ教育環境が促進されて久しい。文部科学省の提唱するインクルーシブ教育とは、「障害者が積極的に参加・貢献できる共生社会の実現」であり、「教育分野の課題は、一人一人に応じた指導や支援（特別支援教育）に加え、障害のある者となない者が可能な限り共に学ぶ仕組みを構築すること」（文部科学省、2015）とある。このような取り組みと呼

応して、発達障害の早期発見と診断、または、潜在的発達障害者の同定などが促進されている。

文科省の調査（2012）によると、通常の学級における発達障害のある児童生徒（特に高機能自閉症・注意欠陥/多動性障害・学習障害：以下注意欠陥/多動性障害をADHDまた学習障害をLDと示す）の在籍率の割合は増加傾向にあることが報告されている。これは、必ずしも医師の診断によるものではなく、学級担任を含む複数の教員によって判断された回答を含んでいる。これらの増加には、必ずしも自閉症スペクトラム障害（以下ASDと示す）などの特性を持った児童が増えているのではなく、今まで見過ごされていた特性がASDと診断されるようになったために診断される児童が増加した可能性も示唆されている（東條, 2018）。日本の社会全体の発達障害に対する理解が進むことにより、これまで見過ごされてきた発達障害の多様性に対する視点を日本社会が受け入れられるようになったことも増加傾向の要因の一つではないかと思われる。

2, ASDのスペクトラム的視点の背景

スペクトラムという語は、光のスペクトラムを意味する連続性を表現している。ASD (Autism Spectrum Disorder) 「自閉症スペクトラム障害」におけるスペクトラムとは、自閉症の症状の連続性を意味している。非常に重度の障害レベルから、外部からはわかりにくい軽度の障害レベルのものまで、あるいは、ADHDやLDなどの他の障害との併発などにより、二つとして全く同じ症状ではありえないことでも連続性を表している。近年では、上述のように、発達障害が疑われる学生や発達障害傾向という言葉で表現される学生の存在が顕在化されることにより、発達障害者と健常者との境界があいまいになり、障害と個性の明確な線引きが非常に困難な時期に来ていると考えられる。「障害」と「個性」の間には健常者を含む、連続的なスペクトラム的視点で考える必要があると考える研究者もいる（大隅, 2016）。

3, なぜ、スペクトラムなのか：連続性と多様性の要因

近年の医学および科学技術の発展によって、発達障害に関わる遺伝子研究も飛躍的に促進した。その原因因子を特定するための遺伝子研究や、脳神経科学的研究など様々な側面から研究が促進されてきている（Takumi, et al, 2010; Inui, T., Kumagaya, S., Myowa-Yamakoshi, M. 2017）。特に遺伝子研究では、動物実験によって、ある遺伝子を人工的に働かせなくして自閉症のモデルマウスを作成した基礎研究をはじめ、双子研究によっても、環境因子よりも遺伝子の寄与が大きいことが報告されている（堀越・土屋, 2018）。また、アメリカのある財団が進める自閉症関連の遺伝子研究では、1000以上の自閉症に関わる遺伝子の研究が同時進行で進んでいる（大隅, 2016）。しかしながら、環境因子の影響も全く否定することはできず、母体を介して胎児の脳が様々な化学物質の影響を受けると、遺伝子の突然変異を起こす可能性があ

ることも示唆されている。また、近年のエピジェネティクスの考え方は、環境因子が遺伝子発現に大きくかかわっていることを示唆し、それが、自閉症の連続性・多様性にも大きく寄与している可能性があるとも言われている（堀越・土屋，2018）。

4. 大学における課題（気づかない学生）

近年では、大学入学後や成人してから発達障害と診断されるケースも少なくない。発達障害の中でも、特に外部からはわかりにくい知的な障害をとまなわない（むしろ知的優位にある場合もある）が、大人になってからの生きにくさ、人間関係の軋轢、社会的疎外感などを経験する中で、その障害を自覚するようになる事例が多く報告されている（星野，2017）。また、優秀な成績で大学に入学し、大学生として学生生活を送る中で、「ちょっと変わった学生」「友達付き合いが悪い人」「話がかみ合いにくい人」などの特徴を持った学生が、学生相談室に行き発達障害傾向である可能性を示唆されるケースなども報告されており、大学における学生相談の役割にも重要な変化が求められていると考えられる（高石・岩田，2012）。

以上を踏まえ本論文では、発達障害が疑われる学生の現状と課題について以下の6つの観点：(1) ASD 閾下ケース、(2) 閾下ケースの精神医学的問題、(3) 発達障害学生の現状と支援ニーズ、(4) 発達障害学生の支援体制や学生のアセスメント、(5) 大学生の自閉症スペクトラム障害傾向に関するこれまでの研究と今後の課題、(6) 今後の発達障害学生のスクリーニング、アセスメント、から議論し、最後に定型から非定型へのスペクトラム的視点の重要性について考察する。

II 発達障害が疑われる大学生の現状と課題

1. ASD 閾下ケースについて

DSM5（2013）以前の自閉症スペクトラム障害（以下ASD）の診断基準では、それぞれの臨床像が診断基準に対してあてはまるか、あてはまらないかによって評定がなされてきた。これに対しDSM5の新しい診断基準では、各症状がどの程度の重さ（日常生活への支障の度合い）であるかを評定する方法が採用されるようになり、以前よりもASDの中に見られる個の違い、多様性をよりきめ細やかに評定できるようになった。一方で、診断基準には満たないが自閉症状を示すケースの存在が目立つようになり、特に精神科臨床の現場でこのようなケースが議論されることが増えてきている。ASDの症状があっても診断までに至らないケースのことを閾下（Subthreshold）と表現することがあり、神尾ら（2013）によると、通常ASD閾下とは、中等度以上の自閉症状が認められるが、その症状の程度や数が自閉性障害やアスペルガー障害などの中核群の診断基準を下回るケースを含めて用いられることが多いという。これは例えば、

対人コミュニケーションの問題は臨床レベルでも、常同反復的行動パターンは軽度であったり、無視できるレベルであったりする場合などのことを指す。精神科医療の現場では、不安やうつなどの症状を主訴として病院を訪れた患者のなかに、決して少なくない割合で背後に自閉的特徴を持つこうした閾下ケースが存在しているようである。しかし、閾下ケースは定義自体が曖昧なこともあり、研究自体が乏しい現状があるといえる。

2. 閾下ケースの精神医学的問題

閾下ケースの研究報告は国内では数件しかないが、ASD 閾上ケース、閾下ケースの精神医学的ニーズの検証を目的とした、大規模児童サンプルを対象にしている疫学的研究 (Kamio et al., 2013) がある。これによると、ASD と非ASD とを明確に区分する境界は存在せず、自閉症状は集団内で明確で不連続なASD 診断閾値は示さず、なめらかに分布することが示されている。これはつまり、自閉症的行動特性はスペクトラム上に連続的に分布しており、カットオフが微妙に移動するだけで診断される人数が大幅に変わることを示している。

さらに、こうした閾上、閾下のケースの精神医学的問題に関する検討で、保護者による回答の対人性応答尺度 (Social Responsiveness Scale: SRS) によって得られたASD 高リスク群 (閾上ケース)、中リスク群 (閾下ケース)、低リスク群の3群比較から、ASD 中リスク群 (閾下ケース) は低リスク群よりも、全般的な精神学的問題 (臨床閾上レベル) をもつリスクが13倍高いことが分かっている。加えて、全般的精神医学的リスクが閾上にある児童2,250人の内訳が、自閉症状閾上レベルが21%、閾下レベルが44%と、閾下ケースが最多との報告もある。自閉症スペクトラム障害成人への小集団CBTの介入を行なっている黒田ら (2013) も、研究過程で見られた閾下ケースの特徴について、閾下ケースであっても閾上ケースと同様に職場などで不適應を起こしていることや、社会性の問題があることによる支援ニーズが高いことを述べている。

閾下ケースは自閉症状が顕著でなく、外からは本人の日常生活での努力が見えづらいことも多い。彼らが抱えている社会的な困難の大きさやそれに伴う様々な精神症状のリスクを過小評価しないよう注意が必要だと言える。

3. 発達障害学生の現状と支援ニーズ

日本学生支援機構が毎年実施している「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」では、障害者自立支援法が施行された2006年以降、発達障害の項目が新たに設けられ調査が続いている。2006年度当初の報告では高等教育機関 (短大、高専を含む) の発達障害学生 (診断書有) の数は127名だったが (日本学生支援機構, 2006), その後年々増え続け、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律 (障害者差別解消法)」が施行された10年後の2016年度では発

発達障害学生（診断書有）は4,148人（日本学生支援機構, 2016）、翌2017年度は1,026人増の5,174人となっている（日本学生支援機構, 2017）。発達障害学生（診断書有）の内訳をみると、ASDが最多で3,118人で全体の6割を占め、次いでADHDが1,187人となっている。また、発達障害であるとの医師の診断書はないが、発達障害があることが推察されることにより、学校が何らかの支援（教育上の配慮等）を行っている支援障害学生は3,191人であり、こちらも前年度より145名増加している。こうした学生への支援の実施状況としては、障害学生への支援を実施している学校は741校、内455校が発達障害学生への授業支援を実施、発達障害学生への授業以外の支援を実施している学校も444校であった。授業支援、授業外支援ともに障害学生への支援の実施状況として最も多いのが発達障害学生への支援であった。

このように、診断書のある発達障害学生だけでなく、診断書はないが特別な配慮を必要とする学生、つまり前項で述べてきた闕下ケースにあたる可能性のある学生の数も年々増加し、各大学におけるこうした学生らへの支援の必要性が大きくなっていると考えられる。

4. 発達障害学生の支援体制や学生のアセスメント

こうした現状に対して、すでに様々な大学で発達障害やその傾向のある学生のために学生支援が行われている。その結果、修学支援、就労支援を通して成果を上げている大学も増えてきている。先進的な取り組みをしている富山大学では、入学前の高校生に対する事前相談や進学支援からスタートし（第Ⅰ期支援）、定期面談を基本として本人の課題を共有していく修学支援（第Ⅱ期）、大学3年～4年にかけてゼミでの適応や就職活動をサポートする支援（第Ⅲ期）、最終的には就職活動や就労後のフォローアップを行う支援（第Ⅳ期）までが支援体制として構築されている（西村, 2017）。このように障害学生に対する支援体制は年々充実してきているが（日本学生支援機構, 2017）、一方で相談室にまでたどり着けない学生が非常に多くいる可能性も見過ごしてはならない。特に、発達障害学生の中で最も数の多いASDやその傾向のある学生に関して言えば、自ら援助を求め行動を起こすことは非常にハードルが高いことが想像できる。彼らは対人的なコミュニケーションにおける困難を特性として持つ上に、昨今の研究からASD者には自分自身の社会的側面を把握する自己理解に弱さがあること（Lee & Hobson, 1998; Farmer, 2007）や、自己の感情理解に限界があることなども示されている（Williams, 2010）。診断を受けていない、闕下ケースの学生であれば尚更、周囲との間で不適応が起きていたり、不安な感情が高まっていたりしても、その背景にある自分の特性にまで考えを巡らすことは難しいだろう。実際、発達障害学生のアセスメントに関わる論文の多くが、大学就学前には診断を受けていない場合のアセスメント研究であり、就学後の大学生活上のつまづきや困り感などの顕在化により、発達障害のリスクが検討される場面が非常に多いことが報告されている（吉田・田山, 西郷・鈴木, 2017）。

5. 大学生の自閉症スペクトラム障害傾向に関するこれまでの研究と今後の課題

大学生の自閉症スペクトラム傾向のスクリーニングとして最もよく使用され、妥当性、信頼性ともに確認されているのが、若林・東條・Baron-Cohen, Wheelwright (2004) による、自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版である。この尺度は、臨床的診断と健常者の自閉的傾向の個人差の測定の双方で有効であることが報告されており、一般大学生の自閉傾向の測定のために多くの研究で使用されてきている。しかし、大学生に対するスクリーニング検査としてこの尺度の使用を考えたとき、障害学生やその傾向のある学生の支援のためという目標があったとしても、特定の障害傾向のスクリーニングを全学生対象に自記式で実施するのは現実的な課題が大きいと考えられる。これに対し高橋 (2012) は、発達障害やその傾向のある学生に対し、その支援ニーズを把握することを目的として、自記式質問紙を開発している。AS困り感尺度として作成されている質問紙は、大学生が自閉症スペクトラム障害の行動特徴により生ずると考えられる困り感を抱いている程度を測定することを目的としている。本人の困り感に対して支援を充てていくことはその支援効果も大きく期待でき、周囲としても適当な対応が取れることは非常に意味がある。また、差別解消法の条文に「障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合」に合理的配慮義務が生じるということが示されているように、本人の「配慮を求める意思」が配慮提供には重要な意味を持つ。しかし、発達障害のある学生で自分からうまく配慮要請ができない場合には、意思表示の仕方を支援することも期待されている。内閣府の基本方針には「意思の表明がない場合であっても、当該障害者が社会的障壁の除去を必要としていることが明白である場合には、(中略)適切と思われる配慮を提案するために建設的対話を働きかける」ことも求められている (高橋, 2016)。このように、「困り感」の認識の無い学生、意思表示の無い学生に対する支援可能性を探ることも必要だと考えられる。前述のとおり、ASD者は自分自身の社会的な側面に関する理解が健常者とは異なり、自分自身の感情に関する把握が弱いという特徴がある。このことを踏まえると、本人が自ら配慮要請できるようになるために周囲からのアプローチを行い、社会的な自己に関する本人の認識を支え、社会からの孤立や不適応を緩和していくような支援も必要だと考えられる。

6. 今後の発達障害学生のスクリーニング、アセスメントに必要な視点

では、具体的に学生のASD傾向をスクリーニングするために今後必要になる視点とは何だろうか。日本学生支援機構は「教職員のための障害学生修学支援ガイド」を希望の教育機関に無償で配布し、発達障害の傾向のある学生に対する対応例などについて、教職員に向けた情報提供を行っている。例えば、「現時点では知的な問題が少なく、大学入学まで様々な問題はあったにせよ、自他ともに発達障害とは認識せずに進学し、発達障害と推定される場合」として設けられた項目では、診断の無いASD傾向のある学生が取りやすい行動上の特徴を、教育現場

における具体例とともに記述している(日本学生支援機構, 2015)。ここで取られている視点は、周囲から見たASD傾向のある者の行動特性であり、現時点ではこうした内容がチェックリストとしてまとめられている段階だと思われる。本人の認識や困り感とは別に、教職員からの視点で学生の大学生生活上での行動観察により見えてくる、ASD傾向に関連する行動を捉えることができる尺度は今後必要になると考えられる。なぜなら、これらは学生本人への直接的な助けになるだけでなく、学生本人の求めが薄くとも、何らかの困難によって教職員の方が対応に苦慮している場合にも役立つと期待できるためである。特に診断がなく、困難の自覚のない学生に対し周囲が対応に苦慮することの理由の一つは、周囲から見て彼らが定型発達とはどう違うのか、どういう特性や弱点によって適応が難しいのかについての知識や理解が乏しいことも考えられる。周囲からの目で見えたASD傾向の行動特性を明示化することで、この部分に手を当てていくことが可能になる。また、このように周囲からASD傾向を捉え、対象を理解していく際に重要になるのがスペクトラム的視点である。白か黒の二分法で対象を評価するようことはせず、障害傾向により現れる行動が社会適応上どの程度の重さなのかを量的に捉え、個々人に合わせた対応や支援計画を丁寧に立てていく必要があると思われる。

昨年より臨床現場や教育現場でも使用が可能になった対人応答性尺度第二版(Social Responsiveness Scale, Second Edition; SRS-2)は、保護者や教師など、本人の日常を良く知る人の回答によって、自閉的行動特性を量的に捉えることができる尺度である。この尺度は、昨今の自閉症を含む発達障害の考え方を反映しており、一般集団の中にも軽度～重度までの人が幅広く分布することを前提としているため、重症度を量的に測定することができるようになっている。また、治療による効果などの変化も見ることができるようになっており、治療や支援によって社会的な面や常同行動に変化があったとき、それらを数量的に捉えることができる。

これらのことから、今後の発達障害学生のスクリーニング、アセスメントに必要な視点として、大学生生活の場面で観察される行動特徴を周囲からの視点で評価し、閾下ケースであっても行動的な症状を量的に示すことができるようにしていくことが重要だと考えられる。これにより、配慮要請ができない学生へのサポートだけでなく、教員側の学生の特性理解が深まり、両者間の認識のずれや困難感の軽減が期待できる。さらに、今後より深く対象を理解していくためには、これまでの研究で長く続いてきた定型発達との比較によるASD者の欠陥説の主張ではなく、ASD傾向の者が定型発達より得意なこと、強みとなることが精緻に概念化され、測定できるようになっていくことも必要だと考えられる。このことはすでに神経科学の分野などで進展しており、例えばKeehn B et al. (2008)による研究では、視覚的探索を行っている時に活性化される脳領域が、定型発達では視覚処理に関わる後頭側頭葉のみに限定しているのに対し、ASDではあらゆる領域が活性化していたと報告されている。これは、ASD者の注意特性、なかでも部分的詳細、特徴情報への際立った注意力に関連していると考えられている。こうした強みとなる力が生活場面ではどのように見られるのか、またそれらを活かせる場面、文脈とは何かを考えていくことが教育の場では求められていくだろう。

最後に、発達障害学生のスクリーニングを検討する上で無視できないのは、発達障害の青年期以降に出現することが多い併存症の問題である。特にASDは精神障害を合併しやすいと言われており、岡本ら(2018)による報告では、ASD特性を持つ大学生についての調査で、併存症として最も多いのが気分障害、次いで不安障害が多いことが示されている。Tantam(1998)の調査では、ASD者の併存症はうつ病が最も多く、年齢が高くなるにつれて多くなることも報告されている。本研究の冒頭でもASD閾下ケースの精神症状併発のリスクの高さについて触れたが、精神科医療の場では、こうしたケースは一般的な精神症状のために精神科を受診した際に、現症から発達障害が疑われることが多いとのだという(神尾ら, 2013)。大学でも未診断や閾下ケースにあたる学生は特に、精神症状が前景に出ており、その背後に発達障害傾向があることも多いように思われる。吉田・田山・西郷・鈴木(2017)は、社会不安障害検査(SAD)の得点とAQ指数やASDの対人的困り感得点との間に相関が見られることや、AQ指数高群における大学生生活不安得点(CLAS)が高いことなどを示し、社会不安や適応感(大学生生活不安)などの指標が、テストバッテリーとして有効である可能性を述べている。一つの指標のみで対象の状態像を把握するには限界があることを前提として、ASDの併存症に関わるいくつかの指標を使用し、その上でより細かな面接対応へと進んでいくことも今後重要になってくるだろう。

Ⅲ 終わりに：定型から非定型へのスペクトラム的視点の重要性

本当の意味での共生社会の実現のためには、個性と障害の間が連続的であり、発達障害者と健常者が同じスペクトラム上にあるという観点で理解されなければならないと考える。

赤木(2017)は、教育現場でのフィールドリサーチを基に「インクルーシブ」の意味について、日米の違いを明確に表現している。周りとの調和が重要視され同じ行動や考え方に高い価値を置く日本のインクルーシブ教育とは、同一性(健常者)の中に異質(発達障害者)を受け入れる姿勢となる。しかしながら、米国では、人種や民族・宗教・経済格差・肌の色などの「違い」を個人の特性(個性)として捉えるために発達障害も単なる違い(個性)の一つとして捉えるのがインクルーシブであると結論している。このような文化的土壌がエジソンやテンブル・グランディン、現在ではスティーブ・ジョブズやビル・ゲイツを育てる土壌となっているのではないと思われる。自閉症者の中には、すばらしい才能を発揮し、文化や社会の発展に貢献してきた人物が多くいることが知られている(シルバーマン, 2017)。個人の特性に価値を置く欧米社会においては、発達障害傾向の特徴は、むしろ称賛される「個性」となりうる。共生・協調・集団での調和が求められる日本社会では、存在自体がかなり浮き上がって見え(皆と同じことができなければ一人前ではない)、発達障害に対する知識の浸透が十分ではない教育現場においては、当事者は個性を発揮できないだけでなく、前述のように精神疾患を併発するようなかなり生きづらく深刻な二次障害を生み出す可能性も否めない。閾下ケースの大学生に

対して健常者か障害者かというどちらかにカテゴライズしてラベルを貼るのではなく、人間の遺伝的多様性の表出の形としてスペクトラム的視点で彼らの個性を受け入れる必要性が求められると考える。

今後の日本の大学においては、ますます発達障害傾向の学生が増加していく傾向が推察される。彼ら（発達障害傾向や疑われる学生）の個性を伸ばせる大学教育の環境づくりと支援の在り方が今後の日本社会の発展には不可欠ではないかと思われる。

参考文献

- American Psychiatric Association 『DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル』 高橋三郎, 大野裕監訳, 医学書院, 2014, 49-57.
- Farmer, M., Robertson, B., Kenny, C., & Siitarinen, J. "Language and the development of self-understanding in children with communication difficulties.", *Education and child psychology*, 2007, 24(4), 116-129.
- 独立行政法人日本学生支援機構「平成18年度（2006年度）障害学生の修学支援に関する実態調査」
https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afieldfile/2015/11/17/chosa06_houkoku_1.pdf, アクセス日：2019年1月10日
- 独立行政法人日本学生支援機構「平成28年度（2016年度）障害学生の修学支援に関する実態調査」
https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afieldfile/2018/07/05/h28report_h30ver.pdf, アクセス日：2019年1月10日
- 独立行政法人日本学生支援機構「平成29年度（2017年度）障害学生の修学支援に関する実態調査」
https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afieldfile/2018/07/05/h29report.pdf, アクセス日：2019年1月10日
- 独立行政法人日本学生支援機構「教職員のための障害学生修学支援ガイド（平成26年度改訂版），2015.」
https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/guide_kyouzai/guide/index.html#guide_pdf, アクセス日：2019年1月10日
- Kamio, Y., Inada, N., Moriwaki, A., et al. "Quantitative autistic traits ascertained in a national survey of 22, 529 Japanese schoolchildren.", *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 2013, 128(1), 45-53.
- 神尾陽子・森脇愛子・武井麗子・稲田尚子・井口英子・高橋秀俊・中鉢貫行「未診断自閉症スペクトラム児者の精神医学的問題」, *精神経誌*, 2013, 115巻6号, 601-606.
- Keehn, B., Brenner, L., Palmer, E., Lincoln, A.J., Muller, R.A. "Function brain organization for visual in ASD", *Journal of the International Neuropsychological Society*, 2008, 14(6), 990-1003.
- 黒田美保・川久保友紀・桑原斎・金生由紀子・神尾陽子「自閉症スペクトラム障害成人への小集団認知行動療法の研究過程でみられた閾下症例」, *精神経誌*, 2013, 115巻6号, 623-629.
- Lee, A., & Hobson, R. P. "On developing self-concepts: A controlled study of children and adolescents with autism", *Journal of child psychology and psychiatry*, 1998, 39(8), 1131-1144.
- 西村優紀美「発達障害のある大学生の支援—修学支援から就職後の支援まで—」, *学園の臨床研究*, 2017, 17巻, 5-14.
- 岡本百合・三宅典恵・永澤一恵・香川美美・矢武寿子・磯部典子・黄正国・二本松美里・吉原正治「レジリエンスの視点から自閉症スペクトラム特性を持つ学生の支援を考える」, *総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集*, 2018, 34, 21-28.
- 高橋知音『発達障害のある大学生のキャンパスサポートブック』学研教育出版, 2012.
- 高橋知音「合理的配慮の考え方」, 『発達障害のある大学生への支援』高橋知音編著, 金子書房,

2016, 9-19.

- Tantam, D. "Asperger's syndrome", *J child Psychol Psychiatry*, 29, 1998, 245-253.
- 吉田ゆり・田山淳・西郷達雄・鈴木保巳「発達障害学生支援のためのアセスメントシステムの検討—ニーズの把握と鑑別の見立てに着目して—」, 長崎大学教育学部紀要3, 2017, 173-181.
- 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S., Wheelwright, S. 「自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化: 高機能臨床軍と健常成人による検討.」, *心理学研究*, 2004, 75, 78-84.
- Williams, D. "Theory of own mind in autism: Evidence of specific in self awarenesss?", *Autism: International Journal of Research and Practice* 2010, 14, 474-494.
- 大隅典子『脳からみた自閉症: 「障害」と「個性」のあいだ』講談社, 2017
- 堀越隆伸・土屋賢治「遺伝・環境・エピジェネティクスと自閉スペクトラム症」, 『自閉スペクトラムの発達科学』日本発達心理学会編, 新曜社, 2018, 67-76.
- 東條吉邦「発達環境と自閉スペクトラム症」, 『自閉スペクトラムの発達科学』日本発達心理学会編, 新曜社, 2018, 77-90.
- スティーブ・シルバーマン『自閉症の世界』正高信男, 入口真夕子訳, 講談社, 2017
- 星野仁彦『発達障害に気づかない大人たち』祥伝社, 2017
- 高石恭子・岩田淳子『学生相談と発達障害』学苑社, 2012
- 赤木和重「日本「発」の手前で: アメリカにおけるインクルーシブ教育の実際から: いま, あらためて「日本発・発達心理学会」の可能性を探る, 日本発達心理学会からの情報発信」, 『日本発達心理学会第28回大会論文集』2017, 22.
- Tamada, K., Tomonaga, S., Hatanaka, F., Nakai, N., Takao, T., Miyakawa, T., Nakatani, J., Takumi, T. "Decreased Exploratory Activity in a Mouse Model of 15q Duplication Syndrome; Implications for Disturbance of Serotonin Signaling.", *PLOS ONE*, December 15, 2010.
- Inui, T., Kumagaya, S., Myowa-Yamakoshi, M. "Neurodevelopmental Hypothesis about the Etiology of Autism Spectrum Disorders", *Frontiers in Human Neuroscience*, 2017.
- 文部科学省「インクルーシブ教育システム構築事業」文部科学省初等中等教育特別教育支援課, 2015 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/06/16/1358945_02.pdf, アクセス日: 2019年1月6日

Current Status and the Tasks for Students who Show the Autistic Characteristics: Importance of Spectrum Viewpoint from Typical to Atypical Development

Asano NISHIDA, Sayuri TAKAHIRA

Abstract

It becomes an explicit fact that students who show the autistic characteristics has been increasing more and more in any Japanese university. It may induce an argument in which there are no clear boundary between autistic characteristics in the atypical development and a conspicuous individuality in the typical development. The most recent findings in genetic research suggest that gene expressions are influenced by environmental factors and it may explain the continuity and the variability between TD and ASD. However, these findings are not shared at the educational settings. Therefore, this paper discusses about the current status and problems regarding the students who have autism characteristics based on six viewpoints. First, we discussed about the students who show some of the autism characteristics and also seriousness of the psych medical problems of those students. Next, we mentioned about the support system and the assessment tools that is necessary for not only the students who already diagnosed as an autism, but also students who are placed in subthreshold area. Then, we summarized the previous studies related to the university students who have the Autism characteristics and provided the possibility for future assessment for such students. Finally, we discussed about the importance of the spectrum viewpoint in which continuity from typical to atypical development in terms of students' support system in the university

Keywords : university students, subthreshold case, autism spectrum disorder